



なきごえ



1993

4

OSAKA  AKASO

大阪市
天王寺動物園協会



New Face

(撮影：大谷直樹)

もくじ

- 2 — New Face クロライチョウがやってきた
- 3 — 動物と私 コンパニオン・アニマルの居る暮らし(東田和弘)
カバーウォッチング ホンケワタガモ
- 4 — 野生動物と野外博物館(金井塚 務)
- 6 — 動物と共に36年(山田 茂)
- 8 — グラフZOO 猛禽類-II
- 10 — 動物なんでも相談室
- 11 — ZOO DIARY

カバーウォッチング

ホンケワタガモ
カモ目 カモ科

Somateria mollissima
大型の潜水性のカモで、ツンドラ地帯で繁殖し、冬は常に海で生活しています。多量の綿羽を敷きつめた巣をつくるので、北欧の人たちはこの羽毛をダウンとして利用しています。

(撮影：大川光雄)

||||| 動物と私 |||||

コンパニオン・アニマルの居る暮らし

皆さんCAPPと言う言葉を耳になさった事が有りますか？

CAはコンパニオン・アニマル そばにいて一緒にすごしている動物(あるいは伴侶動物)あとのPPはパートナーシップ・プログラム 共に暮らすためのやり方、計画とでも言うのでしょうか。

このことをもう少し分かりやすく言うならばCAPP活動とは身近にいる動物といままでよりもっと上手につきあって人も動物もふれ合いから互いのもっている色々な良い効果を及ぼし合ってもっともっと快適な関係を作り上げて行こうと言う実践運動なのです。この中には最近とくに関心が高まっている“物質から精神へ”で現される“心の問題・動物のもつあたたかさ、温もり”がおおきく含まれているのです。動物が好きな皆さんのことですからもう既にご存知と思いますが、新聞、テレビなどに時々登場する動物達の老人ホーム訪問、仔ネコを膝に乗せてもらっていたおばあちゃん動かない筈の手で抱き止めたとか、痴呆症のお年寄りが半月後に突然“犬が来た!”と以前の訪問を思い出したりあるいは動物を撫でたりさわたり一緒に暮らしたりしていると血圧が下がったなどと取り上げられているのもこのCAPP運動の成果のひとつなのです。

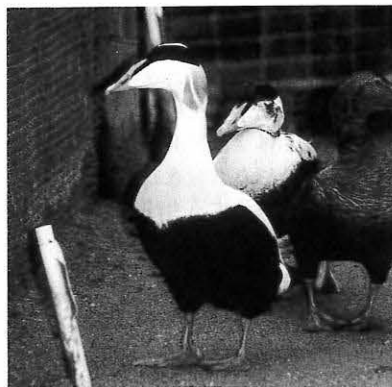
このCAPPはアメリカのワシントン州立大学のビュースタド先生により提唱され広まったもの

← クロライチョウがやってきた

キジ目
ライチョウ科

昨年11月にクロライチョウが入園しました。生息地は、ヨーロッパからシベリアにかけての沼沢と原野です。

5月頃には、可愛い2世が誕生するものと期待しています。



東田和弘さん
(開業獣医師)

で、日本へはハワイ大学のアレン宮原先生により1985年9月に紹介されました。そして翌年の1986年より日本動物病院福祉協会(JAHA)のメンバーによりはじめられました。

関西でも、我々JAHAの会員が中心になってボランティアの人たちと共におもに特別養護老人ホームを中心に訪問活動を行っています。

コンパニオン・アニマルとはペット：愛玩動物という言葉のもっているようなただかわいいだけ、かまってやるのは飼主が気の向いたときにだけでそれ以外の時は…と言うような上下だけの一方的なつきあいではなく、共にくらす仲間として伴侶としての動物と一緒に居ることが、どんなに毎日のくらしを楽しくしてくれる事かどんなに良い効果を与えてくれるかを含んでいるのです。このことをより多くの人にわかってもらう事は、動物達の存在する値打ち意義を高めることにつながるでしょう。“事情があつて今は犬や猫は飼われへんけど、隣の〇〇さんとこを見てると犬や猫てええもんやなーそのうちにうちも飼いたいなー”という具合に理解をしめしてくれる人が増えてくると飼主さんは勿論のこと犬や猫も肩身のせまい思いをせずにアパートでもマンションでも暮らせるようになるのではないのでしょうか？でもそのためには周りの人の理解を期待しているだけではなく飼主さんたちは自分達の飼っている動物が周りの人に喜んで受け入れてもらえるように自分の動物のしつけや、手入れをしなければならないのです。きたない、こわい、うるさいなどの苦情は飼主さんの正しい方法によるしつけ、手入れなどによりずいぶん減るものです。われわれの協会はそのためにも毎年講習会を開いたり、病院での相談や指導も行っています。また訪問活動のボランティアについても協会や協会加盟の動物病院に尋ねてください。(ひがしだ かずひろ)

社団法人 日本動物病院福祉協会
〒113 東京都文京区本郷4-1-11
YK 本郷5階

安芸の宮島と言えば厳島神社というように、平安時代以降の国宝、文化財の島として全国的に知られ、年間200万人を越える観光客が訪れています。確かに宮島には平家納経をはじめ数々の国宝重要文化財があり、「文化財の島」といったイメージは間違いではありませんが、一方で生物的自然が豊かに残る島という事実気づく人はほとんどいないようです。このことは観光客だけではなく住民にも言えることでたいへん残念なことです。そして自然に対するこの無関心が宮島に棲む野生動物に危機をもたらしている事実があります。

今日は宮島に生息するケモノのうちサル、シカ、タヌキの3種についてそれぞれがかかえる問題点を提起し、皆さんとともにその解決策を考えてみたいと思っています。

ではまず私の専門としているサルの問題から考えてみましょう。

現在宮島に生息しているニホンザルは、1962年に香川県小豆島から宮島へ人為的に移殖された群れの子孫です。移殖の目的はサルが見知らぬ土地で遊動域(サルの行動圏)をどのように拡げ定着するのかを知ることをはじめ様々な行動学的、生態学的な研究とその成果を生かした文化的観光事業にあったということです。サルが放たれる地域は国の天然記念物「弥山原始林」を含む特別名勝特別史蹟に指定されているために、移殖に際してはたいへんきびしい条件が課せられていました。「植生に多大な影響を与えない程度の頭数に個体数をコントロールすること」というのもその条件の1つです。したがって宮島では捕獲による個体数調整を行っています。捕獲されたサルは営利目的に利用されることなく、学術的利用に限定しその成果を現場にフィードバックできるようなシステムを確立する必要があります。個体数を人為的にコントロールする一方で、移殖の目的を遂行するためには野生の生活を維持することが重要なポイントになります。そのためには野猿公苑を自然教育の場、すなわち野外博物館と規定することが大切だと考

えています。その理由はこうです。(1)資料の収集と保存、(2)資料の調査、(3)教育的普及活動の三点が博物館の三本柱と言えます。野猿公苑における資料といえば、当然サルそのものなのですが、もっと正確にはサルの自然の生活と言うべきです。ですから野猿公苑の餌場というのは公苑の入口のようなものです。サルの基本的な生活は遊動生活にあるわけですから、遊動



遊動するサル

域全体を含めて野猿公苑とみなすべきです。そしてその生活を不当に干渉しないこと(必要以上に餌を与えることなど)が、資料の保存へとつながることになります。そのためには日々の調査研究が欠かせないわけですから職員は研究者たらざるを得ないこととなります。しかしこれで充分というわけではありません。日々の調査研究で明らかになったことは教育的配慮のもとに来苑者に公開されなければなりません。このように(1)(2)(3)が有機的に結びついた活動が宮島におけるサルの存在理由となるはずですし、観光事業として永続させるための必須条件と言ってよいでしょう。

このような野猿公苑の野外博物館化構想は、サルの暮らしを中心としてサルをとりまく自然(主体と環境)についても目を向けさせることとなります。つまり野生の意味を具体的に理解する有効な方法なのです。

次にタヌキについて考えてみます。宮島には豊かな自然があると書きましたが、草本類とケモノについては当てはまりません。古くから宮島に生息している中大型のケモノはシカ、アナグマ、イノシシ(戦後間もなく絶滅)だけです。サルの移殖の経緯は前述したとおりですが、タヌキもごく最近になって宮島に生息するようになったケモノです。余談ですがイタチも最近宮島で見られるようになりました。こうした現象は交通機関(船)が大型化したり、往来が頻繁になったり、夜間も連絡する船が増えることによって渡来するものと考えられます。ケモノの渡来頻度が高まることによって繁殖集団が形成され分布を拡げることになるでしょう。タヌキやイタチはその典型的な例と考えて下さい。そのタヌキに最近皮膚病(カイセン)が蔓延しています。TVニュース等でも取り上げられ、記憶している読者の方もいらっしゃる



と思いますが、その症状は正視に耐えないものです。原因はヒゼンダニによって媒介されるカイセン症ということですが、本当のところはまだ調べられていません。全身の毛が抜け、皮膚は角質化してひび割れ、病原菌に感染して死に至るといった経過をごく簡単にふり返ってみましょう。

私が島内で初めてタヌキ生息の情報を得たのが今から10数年前のことです。そこは市街地から東へ3kmばかり離れた果樹農園でしたが、その後間もなく市街地でタヌキを見たとの情報が相次ぐようになりました。そうこうしているうちに昼間でも町内を歩きまわるタヌキが見られるようになり、珍らしさも手伝って餌を与える人もでてくるようになりました。こうしてタヌキは町内にイヌやネコと共に人家や空家の床下、使われなくなった下水管などを寝ぐらとして利用するようになったようです。その頃から一部地域ではタメフンが公衆衛生上の問題として出はじめました。そして皮膚病の発生という経過をとっています。今では市街地で見られるタヌキのほとんどはカイセン症にかかっているようですが、山中で会うタヌキにはこの症状は見られません。どうもタヌキが市街地で暮らすことが皮膚病との関連を伺わせています。

動物に餌を与えたいという誘惑というのはわからぬわけではないのですが、サルのところでも触れたように、食べることは彼らの生活の中できわめて重要な意味を持っています。それを誘惑にかられるままに餌を与えることは、野生動物の生活を根本から奪うものだと言っても過言ではありません。タヌキの皮膚病があるいは他の寄生虫がヒトに感染しないとは言いきれないとのこと。当面は公衆衛生的見地からの調査と対策が緊急課題ということではありますが、最終的な解決は、タヌキを野生動物として理解するというところに尽きるようです。これはサルの問題とも次に紹介するシカとも共通することだと思います。

宮島を訪れる観光客は棧橋を出るとすぐシカと出会うことになります。宮島のシカも奈良同様古くから神鹿として住民とともに生きてきました。太平洋戦争直後の一時期絶滅しかけたこともありますが、今日では数百頭にまで増加しているようです。シカはタヌキのような皮膚病もなく一見問題ないようにも見えますが、実はタヌキ以上に深刻な問題をかかえているといえなくもありません。

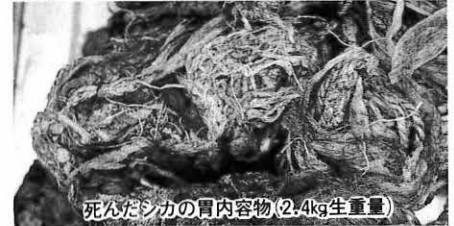
消化不能なビニール、プラスチック等が第一胃に



充滿して死亡するシカがかなりの数になると推測されること。交通事故による死傷、糖質の餌を多量に摂取することによる虫菌、内臓疾患の増加が予想されること。市街地に多く集合してはいるものの山中で野生生活を堅持しているシカが少ないことなど枚挙にいとまはありません。また正確なデータを持ち合わせているわけではないのですが、オスの角が年々細く小さくなっているような印象を受けています。これもおそらく植物の葉を大量に食べなくなったことと無関係ではないでしょう。

宮島では江戸時代に各家で残飯を鹿糞に入れてシカに食べさせましたが、これを美風として今日でも残り物をシカに与えているようです。でも考えてみれば、江戸時代の残飯と今日のそれを比べてみれば量も質も桁外れに異なっていることに気づくはず。動物に餌を与える行為は、善意によるものが多く、それを禁止することは容易ではありません。しかし動機が善であっても、結果が悪いものであるならば、それは改めなければなりません。

私は以前、死んだシカの胃内容を調べたことがあります。開腹してまず驚いたのは第一胃が異様にふくらんでいるのに比べ第2〜4胃以下、小腸、大腸には全く何にも入っていないことでした。そこで第一胃を切開してみても二度びっくりしました。ビニール袋、ミカン網袋、ヒモなど消化



できっこないものがまるで石のように固ってつまっていました。これでは何も食べられません。人間が餌を与えることがこのような事態をひきおこしているのです。サルもタヌキもシカも人間が安易に餌を与えるのを止めるだけで彼らの野生はとり戻せます。野生動物を野生に返す、その時彼らがどれ程生き生きした姿を見せてくれるか、そして興味深い対象となり得るか、一人でも多くの人に知っていただきたい、そこに博物館活動を推進する意味があるのです。(かないづか つとむ)

動物と共に36年

私は今年の3月31日をもって、36年あまりの動物園生活を終え退職しました。思い起せばいろいろな出来事が浮んできます。私が天王寺動物園に臨時職員として採用されたのは、昭和31年11月28日のことでした。同時に3名が動物園に配属されましたが、1人は動物舎の暖房を担当するボイラー係に、1人は飼育係員に、そして、私は管理係に配属されました。当時の管理係の仕事の内容は、園内の施設の補修、整備、樹木の管理が中心でしたが、繁忙期には、昼食時に入場券の販売の応援もしなければならず、とても忙しい毎日でした。約3年間、管理係として勤めた後、昭和34年の夏に上司から飼育係への配置転換の話があり、私も一度動物の飼育を経験したいと思っていたので、とまどいもありましたが、飼育係への配置転換を受けました。管理係として勤めた期間は短いものですが、覚えた仕事はその後の飼育係の仕事にもたいへん役に立ちました。

私が初めて担当した動物はハナジカ、トカラウマ、ペリカン、水禽類でした。当時はまだ、動物の飼料は現在のように豊富になく、水禽類の飼料は大根の葉にフスマと米ヌカを混ぜただけのものでした。トカラウマの餌も切りワラにフスマと米ヌカを混ぜただけの粗末なものでした。先輩の話では当時の餌はそれでも、ずいぶん良くなった方で、それ以前は飼料の不足を補うために荷車を引いて中央市場へ行き、落ちていた野菜の屑を拾いに行ったそうです。当時の餌と現在の餌を比較して、当時の動物達はよく粗食に

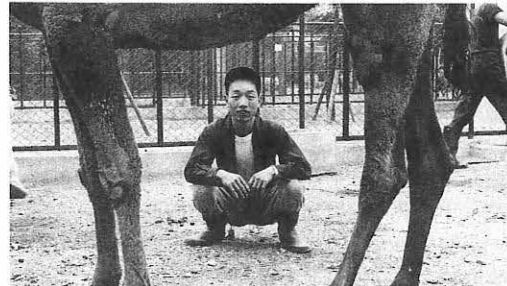


昭和36年頃、人工哺育のライオンと共に耐え、生きていたものだ改めて感心させられます。

また、飼料の運搬も現在のような自動車はなく、金輪の荷車を使っていました。園路はまだ舗装されていなかったの、雨の日にはぬかるみにめり込んで、動かなくなり大変苦労したものです。また、動物舎も開園当時からのもも多く残って

り、老朽化していました。檻式で人避け柵も太い丸太でできていたため、飼育作業の合間をみても、人避け柵と獣舎の補修に追われる毎日でした。そんな古い動物舎の建て替え工事が昭和36年から始まり、檻式から鉄格子のない無柵放養式の動物舎に生まれ変わっていききました。昭和36年に完成したゴリラ舎を皮切りに次々と新しい動物舎が完成しました。開園50周年にあたる昭和40年には天王寺公園グランドの跡地を動物園に編入し、カモシカ園が新設されました。

翌年にはその北側にラクダ舎ができました。新しい動物舎ができると動物を移動させなければなりません。当時は現在のシマウマ舎の位置にヒトコブラクダを2頭飼育していました。新しい動物舎ができ、いよいよ動物の引っ越しとなりましたが、当時はラクダを入れるような大きな檻もなく、ロープでつないで移動させることになりました。



旧ラクダ舎にて

先輩の飼育係が頭絡(牛や馬などの移動や使役などの時に用いる綱や皮製の用具)を作り、ロープでつないで歩かそうとしましたが、園路まではなんとか出たものの、そこに座り込んだまま一歩たりとも動かなくなってしまいました。そこで、しかたなく戸板を作りその上にラクダを座らせロープでしばり、丸太のコロを使って引っ張っていききました。園路はまだ舗装されていなかったの、大変、苦労したことが思い出されます。

翌年の昭和42年にはフタコブラクダが1つが入園してきました。“ムサシ”と名付けたオスは1歳半ぐらいで、良く慣れていたので、昔、牛に引かせて園内の散水に使っていた車を改造して人を乗せる車を作り、“ムサシ”にそれを引かせてお客さんを乗せて園内を一周し、好評を博しました。今では考えられないのかな良き時代の思い出です。

昭和45年8月からはカバの担当になりました。当時のカバ舎にはオスの“フトシ”とメスの“デブコ”の2頭がいました。“デブコ”は昭和27年来園したものの、昭和42年に新しいカバ舎が完

成した翌年の1月31日にオスの“フトシ”が来園するまで、ずっと1頭で飼育されていました。姫路動物園から来園した“フトシ”は当時8歳で、“デブコ”にとってはずいぶん若い夫でしたが、すぐに妊娠し、昭和44年1月28日に第1仔を出産しました。赤ちゃんはメスでしたが、初産のためか子供の面倒をまったくみず、攻撃さえするという有様でしたので、やむなく引き取り人工哺育することになりました。私の前任の担当者の必死の介護にもかかわらず、惜しくも2日目に死亡しました。“デブコ”は出産後、1か月半後に交尾し、私がカバの担当になったその年の8月には、すでに妊娠5か月半になっていました。そこで、9月に入ると出産準備のため、雌雄を分離し室内プールを暗くしました。“デブコ”は11月10日過ぎからは落ち着きがなくなり、室内プールをグルグルと回るようになり、出産の3日前には私が室内に入ると攻撃してくるようになりました。出産が近いと判断し、興奮させないように最小限の給餌と清掃以外は寝室内に入らないようにして、遠くから時々



カバの“デブコ”と赤ちゃん

観察するようにしました。11月16日に清掃のために寝室に入ると、“デブコ”はこれまでより一段と興奮し、私に攻撃してきました。これは出産に違いないと直感し、外に出て窓越しに観察していたところ、午後2時ごろには、プールの中を激しく動いている様子でザワザワという水音が聞こえてきました。そして、1時間後にそっと寝室に入ったところ、出産直後で母親の“デブコ”はまだ落ち着きがなく、プールの中をグルグル泳ぎまわっていました。子供がプールの端の方に呼吸のために浮き上がったのを確認したので、私は母親を興奮させないように、すぐに室外に出ました。1時間あまりして母親も落ち着いた様子なので、寝室に



カバと共に

入ってみたところ、子供は母親の顔に体をあずけ、

落ち着いた様子なので、一安心しました。そこで改めて感激がこみあげてきました。私にとって大型動物の出産は初めての経験でしたのでたいへん感動したことを今でも思い出します。その赤ちゃんはオスで順調に成長し、当時、テレビのアニメ番組でカバに似た姿で人気を集めていたキャラクターにちなんで、“ムーミン”と名付けました。

その後、“デブコ”は昭和47年8月24日に第3仔のメスを出産しました。子供が成長するにともない、収容スペースがなくなり、“ムーミン”は翌年の6月30日に退園させなければならませんでした。当園で初めて繁殖に成功したカバであり、私にとってはたいへん愛着のある“ムーミン”でしたが、無事にここまで育ち、無事に退園させることができたことはとてもうれしいことでした。

私がカバを担当したのは約7年ですの間“ムーミン”以後2回の繁殖を経験しました。第3仔は“ナツコ”と名付けこれも無事に育ち、今も当園で元気に暮らしています。私が担当したのは第4仔のオスまででしたが、その後も“デブコ”は順調に繁殖し、昭和58年1月11日に30年余りの生涯を終るまで合計8産し、6頭を無事に育て上げました。飼育係にとってどんな動物が死亡することも悲しいことですが、とりわけ“デブコ”は私にとって愛着の深い動物でしたのでその別れはとてつらいことでした。

昭和36年から9年間計画で建替えられた動物舎も年を重ねるにつれ補修では追いつかなくなり、新しく建替えが必要になり、昭和53年に老朽化の著しい小鳥舎の建替えの工事が日本宝くじ協会の寄付により始まりました。新しくなった小鳥舎は、電気暖房で出入口にはエアーカーテンを備えた立派なものでしたが、一部には不備な箇所がありました。そこで、それ以後の動物舎の建替えにあたっては、飼育担当者、獣医師、管理職が集ってプロジェクトチームをつくり、飼育担当者の意見を充分取り入れ、動物の生態や習性にあつた、また飼育担当者にとっても作業しやすい動物舎ができるようになりました。そのようなプロジェクトチームによって建設された最初の動物舎が昭和56年に完成したコウノトリ舎でした。以後、57年に猛禽舎、59年にはキジ舎、60年には夜行性動物舎、61年にはサル・ヒビ舎、62年にはネコ舎と鳥の楽園、63年にはヒョウ舎と次々に新しい動物舎が完成しました。平成元年には姉妹都市のオーストラリアのメルボルン動物園から待望のコアラを迎えるためにコアラ舎が完成しています。その後も平成元年にレッサーパンダ舎、平成2年にオオカミ舎、昨年はチンパンジー・オランウータン舎が完成しています。現在は開園80周年の完成をめざして、新しい爬虫類舎の建築計画をすすめています。

このように私が奉職したころの動物園とは較べものになりません。すばらしく変わった動物園の姿を見るにつけてたいへんうれしく思うと共に、今後の天王寺動物園のますますの発展をお祈りして筆をおきたいと思えます。

(飼育課、前首席主任：山田 茂)



(♂)

コンドル(全長約120cm)

南アメリカのアンデス山脈の2000~3000mの高山帯に生息し、翼をひろげると3mにもなる、空を飛ぶ鳥の中では最大のものです。

(♀)



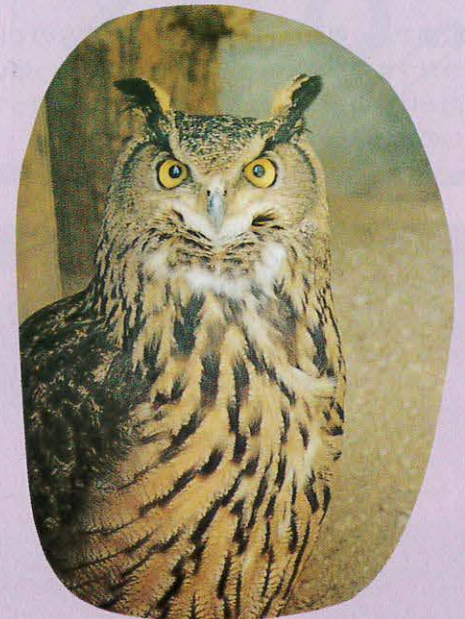
ヒメコンドル(全長約70cm)

カナダ南部から南アメリカ南部まで生息しています。空を飛びながら腐った死体において発見することができるそうです。



フクロウ(全長約50cm)

ヨーロッパ中部からアジアにかけて生息しており、日本では九州以北に分布しています。低地から亜高山帯まで、大木のあるところを好み、村落の社寺林にも住んでいます。



ワシミズク(全長約70cm)

ユーラシア中部以南、北アメリカに分布し、日本では北海道に迷行の記録があるだけでしたが、最近、北海道の北部で繁殖している可能性があることがわかり、調査が行われることになっています。

グランドZOO

猛禽類—II

ひとくちに鳥といっても種々あります。哺乳動物にトラやクマ・オオカミなど肉食のいわゆる猛獣がいるように鳥類にも肉食の猛禽類がいます。今回は昨年の4月号で紹介できなかった当園で展示している猛禽をPart IIとして紹介しましょう。

(撮影：吉本昌俊)



カラフトフクロウ(全長約70cm)

フクロウの仲間では大きいほうで1989年、当園に日本で初めて大阪市の姉妹都市であるロシア共和国のサンクトペテルブルグ市(当時はレニングラード市)から来ました。



シロフクロウ(全長約60cm) (♂)

北極圏のツンドラ地帯で繁殖し、冬期に少し南へ移動するだけですが、まれに北海道へも渡って来ることがあります。地上に巣を作ります。

動物 なんでも 相談室

☆ 公園でよく見るハトは繁殖力の強い種なのではないか？また、よくみると黒っぽい茶色っぽい白っぽいといいますが、どれも同じ科とっていいのでしょうか？

(大阪市：広川由美)



公園や私たちの身のまわりでよく見かけるハトは一般にドバト・イエバトと呼ばれています。ドバトのドはお寺のお堂、つまり堂鳩がなまったものと言われています。

このドバトは、北アフリカやヨーロッパ南部、中近東の岩壁のある海岸に生息しているカララバトを家禽化したものが半野生化したものです。

彼ら本来の繁殖力の強さに加えて、現在生活している都会のビルの谷間が、もともとの生息環境である岩場と大変似かよっているために想像以上の数に増えたと考えられます。

家禽として飼育されているハトには、デンショバトや鑑賞用、食肉用として改良されたものを含め500以上の品種があり、血統書までついているものまであります。しかし、品種改良された結果、体の大きさや羽の色に違いがでてきただけで、これらはすべて同じ科、同じ種の鳥であり、お互いに繁殖可能です。

何らかの原因（例えば、レース中や飼育中の逃走や飼育放棄）で半野生化し、これらの品種が互いに繁殖した結果、それぞれの品種の特徴が複雑に混ざってあらわれています。

ですから、典型的なカララバトの特徴を持って、いる灰色のハトも白いハトも茶色いハトもブチのハトもすべてイエバトと言っていいでしょう。

(飼育課：竹田正人)

☆ 新しい62円切手はキジバトでしょうか？

(大阪市：広川由美)



62円切手のデザインは、おっしゃるようにキジバトです。郵政省では、3年計画で通常切手のデザインを日本の自然をテーマに変更していくとのことです。昨年11月30日から62円切手以外に41円切手がオシドリ、72円切手がヤマガラに変更されています。ここでは身近に見られるキジバトの説明をしましょう。

キジバトは別名ヤマバトやノバトと呼ばれ、シベリア西部から中国・インド南部・ミャンマー・日本まで広範囲に分布しています。日本では留鳥として分布し、平地から山地の林に生息し、庭園や公園などでも見られます。

本来、山地で繁殖し、冬に平地に降りてきていましたが、1960年代から市街地で繁殖するものが出始め、近年では都会の街路樹でも巣を作り繁殖するようになってきました。地上で植物質の食物をとることが多いですが、樹上で木の実を食べることもあります。

体の大きさはドバトより一回り小さく、羽の色は頭から胸・腹までがぶどう色を帯びた灰褐色で、背中と翼の羽は黒く、茶色や灰色の緑どりがあります。また、頸の両側には黒と青灰色のうろこ模様があります。

(飼育課：竹田正人)

2 / 1. トカラヤギのオスが1頭生まれました。

(2月3日) 1月29日

と30日、および昨日に生まれたトカラヤギ3頭が、母親のミルクをうまく飲めていないようなので、介添えて母乳を哺乳させるとともに、人工乳の哺乳も始めました。



2 / 4. ライオンのオス“タケオ”が老衰のため死亡しました。タケオは当園生まれで、飼育期間は21年9か月でした。これは、いままでの当園のライオンの飼育の最長記録19年5か月を2年4か月上回るものでした。

(2月8日) マーラのメス3頭を、長崎バイオパークのご厚意によりいただきました。当園ではオスのみ3頭を昨年10月に入手展示しておりましたので、これでやっと本格的に繁殖を図れるようになりました。



2 / 9. 保護されていた野生のアオサギほか4種5羽が、元気を回復したので自然復帰させました。

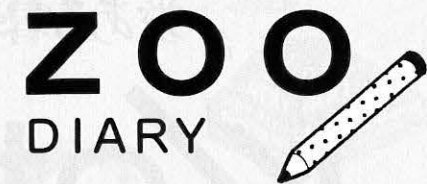
(2月11日) 徳之島観光連盟の観光キャンペーンの一環として、同島産のサトウキビが3頭のゾウに贈られました。ゾウたちはさっそく飼育担当者から手渡されたサトウキビをおいしそうに食べていました。全部で200kgもあり、当分は楽しめそうです。



2 / 15日) シュバシコウのための巣材上げを実施しました。毎年2月になるとシュバシコウの繁殖が順調にいくように、地上3から8mの巣台に上り



今月もおもしろ情報満載



巣材の柳の枝をおいてやります。今年も4月にはかわいいヒナの姿がご覧いただけることでしょう。

2 / 16. 当園生まれのショウガラゴのオス1頭を、上野動物園へ寄贈しました。

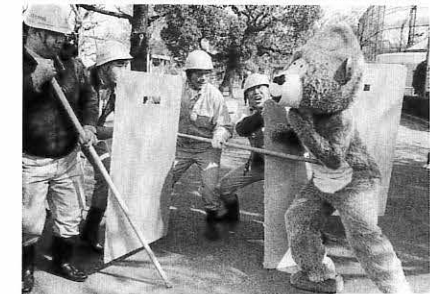
2 / 17. アカカンガルーの母親が急死したため、そのお腹の袋のなかでミルクをのんでいた赤ちゃんの人工哺育を開始しました。

2 / 18. 第90回近畿地区動物園獣医師勉強会を当園で開催しました。

2 / 21. 動物のお話とスライドの会の一環として、「バードウォッチング」を“鳥の楽園”にて開催しました。

2 / 22. ライオンのオス1頭(6か月齢)を繁殖を目的として、福岡県の大牟田市動物園からお借りしました。

2 / 23. ダチョウが今年初めての卵を産みました。
(2月26日) 地震のためゴリラが脱出したとの想定で、脱出猛獣捕獲訓練を実施しました。



この訓練は、猛獣の脱出という非常事態に際し事故を未然に防ぎ、被害を最小限にとどめるために実施されているもので、全職員が捕獲、工作、避難誘導、連絡などの役割を分担し、約30分で訓練は無事終了しました。

2 / 27. オオコノハズクの性鑑別を内視鏡を用いて実施しました。

☆テレホンサービス：771-9999

☆お知らせ

- 夜行性動物の話
日時：4月18日(日)午後1時～
場所：レクチャールーム
- 春の動物と花のフェスティバル
期間：4月25日～5月5日

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光/監修
B5変型判・オールカラー
定価600円

動物園で暮らす様々な生き物達、
自然の中ではどんな暮らしをして
いるのか？ 動物園での世話
の仕方は？ 仲間はず？ など、
写真と精密イラストをまじえ紹
介します。

くらしといかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むしくらしと いかた

野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきものくらしと いかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

オートフォーカスカメラに



フジカラー SUPER HG 400

ピントが合いやすいフィルムです

カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
阪急三番街店 ☎372-5031
OHVAC店
（ギャレ大阪） ☎346-7606

動物の生態を描く唯一の文学雑誌

動物文学

昭和九年平岩米吉によって創刊

本誌は生態研究を基礎として動物文献を収集整理する
とともに、シートン、ザルテン、バイコフ等の諸作家
を紹介した本邦動物文学の母胎です。

<研究・考証・記録・随筆・翻訳等を掲載>
会費/年1,500円(切手72円・呈既刊号目次)

動物文学会

〒152 東京都目黒区自由が丘3-12-2 電話03(3717)1659・振替・東京5-9800

新作
貸出用「楽しい天王寺動物園」
ビデオ 19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料480円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

天王寺動物園の本
入園の記念・手引に……



オールカラー
500円 園内売店にあります。

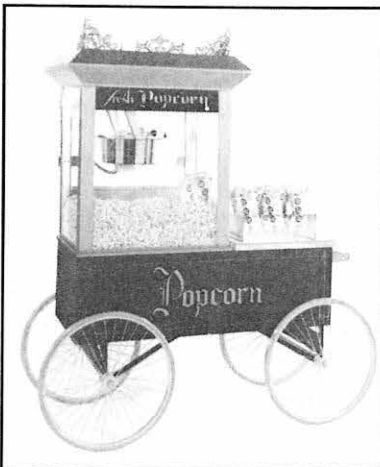
大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201

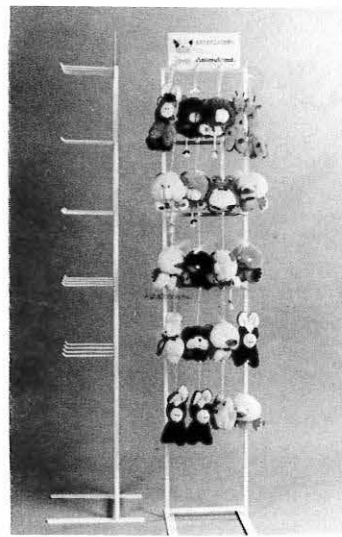
マスタのポップコーン



<営業品目> 製造機械・保温機 他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30
TEL (06)865-0165



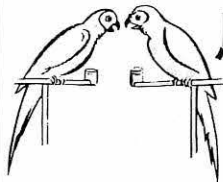


動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

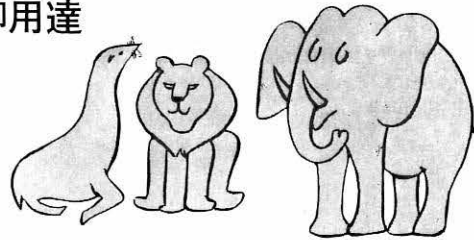
〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号
TEL: (06) 704-8580
FAX: (06) 704-8565



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

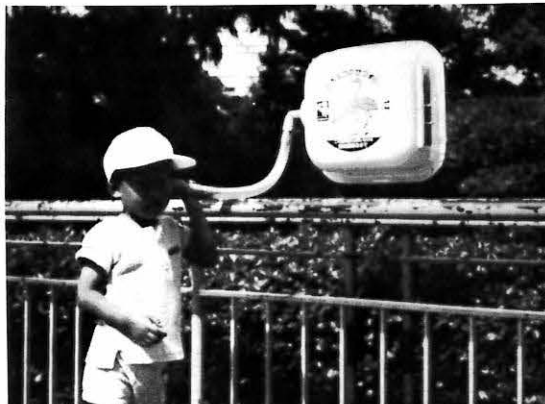


有限会社 吉川商会

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

たのしい動物のお話は、 ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数カ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回 20円

動物園内での お食事、 ご休憩は



動物園内.....

中央売店

TEL 06-771-0973

お食事・飲み物・おみやげ 動物園内
南園売店 TEL 06-771-7110



園内での写真は... 動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機して
おりますのでご説明
に伺いました際は、
よろしくお願ひ致し
ます。

カラー写真 キャビネ1枚 500円

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
TEL 06-856-7444



Our Yogurt has fruity
and rich texture!!

“生イキヨーグル”と
覚えてね。



「ほりたてミルクのおいさが、生きている。」

雪印
ヨーグル

希望小売価格 130g/各120円 250g/各220円(税別)



HIJIRI-KOJIMA

一日
愉快地
たのしめる!!



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。

久竹娛樂株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ 1993年4月10日発行(毎月10日発行)第29巻 第4号 (通巻332号)

編集/大阪市天王寺動物園事務所

発行人/大阪市天王寺動物園協会 土井良彦

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 大阪 3-3 7823

編集委員

(中山良三郎/岩倉善樹/中尾啓一/樽本 勲/中川哲男/吉本昌俊/山根和弘/大谷直樹/宮下 実/長瀬健二郎/榊原安昭)
(森本委利/竹田正人/永田健一/前田 茂/大野尊信/野口秀高/早川 篤/堀内智生/大川光雄/土谷正道/山元貞幸)